

ASD 傾向が私的自己意識に与える影響

○栗根大貴・武田知也

(福山大学人間文化学部心理学科)

問題

近年、精神科を受診する成人に自閉症スペクトラム障害 (Autism spectrum disorder, 以下ASD) をもつ者が多いことが指摘されている (岡本・三宅・香川・吉原, 2019)。ASDとは、社会性の障害、言語・コミュニケーションの障害、興味の限局と常同的・反復的行動の3つの症状から定義される神経発達障害群の1種である (傳田, 2017)。

松田 (2006) によると、ASD者は前述した症状に加えて自己意識が乏しいことが報告されている。木村 (2019) や本村・杉浦・竹林・田中・高田・田村 (2014) によって、ASD傾向と自己意識の関連が検討され、私的自己意識がASD傾向と有意な関連を持つことが示されている。滝吉・田中 (2011) によると、ASD傾向と私的自己意識に関する研究は、自尊感情といった評価的側面を検討したものと、自己効力感といった認知的側面を検討したものに分類され、そのどちらもASD傾向と有意な負の相関がある。ASD傾向には、コミュニケーションの不得手さや社会的スキルの乏しさ、他者の心情を想像することや注意の切り替えの困難、細部への注目といった多様な特徴があるが、それらのうちのいずれが私的自己意識に負の影響を及ぼしているかは明らかになっていない。そこで、本研究ではASD傾向の多様な特徴のうちのいずれが私的自己意識に負の影響を及ぼしているのかを検討する。

方法

参加者

A大学の学生102名 (男性43名, 女性59名) を調査対象とした。

調査方法

2021年7月にMicrosoft Formを用いたWeb調査と、質問紙調査を行った。

調査内容

- 1) ASD傾向: 若林・東條・Simon Baron-Cohen・Sally Wheelwright (2004) の Autism-Spectrum Quotient 日本語版 (AQ-J) を使用した。AQ-Jの下位因子は社会的スキル、注意の切り替え、細部への注目、コミュニケーション、想像力である。
- 2) 自己効力感: 坂野・東條 (1986) の General

Self-Efficacy Scale (GSES) を使用した。

- 3) 自尊感情: 桜井 (2000) の Rosenberg 自尊感情尺度日本語版を使用した。

統計解析

データ分析には、HADver.16.054 (清水, 2016) を使用した。まず、スピアマンの順位相関分析を行った。次に、AQ-Jの下位因子を説明変数、自尊感情と自己効力感を目的変数とした重回帰分析を行った。

結果

順位相関分析の結果

AQ-Jの合計得点と自尊感情、自己効力感に有意な負の相関がみられた。また、自尊感情と細部への注目を除くAQ-J下位因子に有意な負の相関がみられた。さらに、自己効力感とAQ-J下位因子の社会的スキル、注意の切り替え、コミュニケーションに有意な負の相関がみられ、細部への注意との間に有意な正の相関がみられた。

重回帰分析の結果

自尊感情を目的変数とした重回帰分析を行った結果、社会的スキルと注意の切り替えが有意に自尊感情を予測した。また、自己効力感を目的変数とした結果、AQ-Jの社会的スキル、注意の切り替え、細部への注意が有意に自己効力感を予測した。なお、各変数の要約統計量、相関分析と重回帰分析の検定結果は補助資料に記載している。

考察

本研究の結果、自尊感情と自己効力感の低下には、ASD特製の中でも、人の心情を察する能力の低さや注目するポイントを変更することの困難さが関与していることが認められた。また、修士の細かな変化や法則性に気づくことは、自己効力感を僅かに増加させることも明らかとなった。

本研究により、自尊感情や自己効力感の低下と関連するASD特性が社会的スキルの欠如と注意の切り替えの困難であることが明らかとなった。今後は、ASD特性を有するものを対象とした、社会的スキルや注意の切り替えをターゲットとした心理的介入により、自尊感情や自己効力感が改善するかを検討を行う予定である。